

連続企画 人文学と批評の使命Ⅲ

シンポジウム 批評と文学の他者 —固有名と翻訳をめぐって—

日時
2018年 11月 18日 (日)
午後 1時30分 - 5時30分

場所
神戸大学文学部
C棟 5階大会議室

神戸市灘区六甲台町1-1神戸大学六甲台第2キャンパス

発言 ● 武田将明 (東京大学) ● 影浦亮平 (京都外国語大学)
● 古田徹也 (専修大学)
司会 ● 久山雄甫 (神戸大学)
討論 ● 大橋完太郎 (神戸大学) ● 梶尾文武 (神戸大学)

お問合せ先 krweiwei@tiger.kobe-u.ac.jp (梶尾研究室)

主催 神戸大学文学部若手研究者支援プログラム

入場無料・事前予約不要

武田将明

「唯名的欲望—18世紀イギリスにおける小説の生成—」

たけだ・まさあき：東京大学准教授。英文学。「困われない批評—東浩紀と中原昌也」で第51回群像新人文学賞評論部門を受賞。主な著作に「小説の機能」(『群像』2014-6年)。訳書にデフォー『ロビンソン・クルーソー』(河出文庫、2011年)等。

影浦亮平

「ヴァルター・ベンヤミンの哲学における批評と翻訳」

かげうら・りょうへい：京都外国語大学講師。哲学・批評理論。主な共著に“Joseph de Maistre and his European Readers” (2011年)、『現代スペインの諸相』(明石書店、2016年)。論文に「陸羯南の国体論に対するジョゼフ・ド・メーストルの影響」(2018年)等。

古田徹也

「「シューベルトという名前はシューベルトにぴったり合っている」—ウイトゲンシュタインの言語論と翻訳の問題—」

ふるた・てつや：専修大学准教授。哲学・倫理学。2006年に和辻賞受賞。主な著作に『それは私がしたことなのか』(新曜社、2013年)、『言葉の魂の哲学』(講談社選書メチエ、2018年)。訳書にウイトゲンシュタイン『ラスト・ライティングス』(講談社)他。